

令和6年度薬学教育自己点検・評価結果

(1) 令和6年度卒業時アンケートの集計データ分析

薬学部においては、学生の卒業に際し、4年間又は6年間の薬学教育により身に付けることができた知識、技能及び能力について、アンケート形式で自己評価をしてもらい、アンケート結果は、薬学科（表1-1）と創薬科学科（表1-2）を区別して集計した。回収率は薬学科96.9%（65名中63名）、創薬科学科97.7%（44名中43名）であった。

なお、アンケートでは学生に、「1：十分身に付けることができた」、「2：ある程度身に付けることができた」、「3：あまり身に付けることができなかった」、「4：全く身に付けることができなかった」の4つの選択肢から1つを選んでもらうこととしており、薬学教育自己点検・評価においては、1及び2の選択肢を選んだ場合「身に付けることができた」、3及び4の選択肢を選んだ場合は「身に付けることができなかった」として判断した。図1、2にはそれぞれ薬学科、創薬科学科の過去5年間の集計結果の推移を示した。

<1. 全学共通項目（表1-1、表1-2、図1、図2）>

薬学科の学生（表1-1、図1）については、前年度（令和5年度）のアンケートで「身に付けることができた」と評価した学生の割合が90%以上であった項目1）「課題や問題を自ら解決する能力」、2）「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」、3）「他者と協力し合うコミュニケーション能力」、4）「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」、8）「専門教育による深い専門知識・技能」、9）「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」については本年度（令和6年度）も引き続き90%以上と高水準を維持した。また、上記6項目以外の5）「母語以外の外国語（英語など）の語学力（聞く、話す、読む、書く）」6）「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」7）「教養教育等による幅広い知識」10）「地域を志向する意識（富山を通して、地域社会における諸課題を理解し、貢献しようとする意識）」の4項目における「身に付けることができた」と評価した割合については、6）10）に関しては前年度と横ばいの結果であったが、5）7）に関してはそれぞれ15.8、7.0ポイント増加した。

依然として、5）「母語以外の外国語（英語など）の語学力（聞く、話す、読む、書く）」（55.5%）と、6）「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」（42.8%）の2項目については、他の項目と比較して自己評価が低い状態が続いており、グローバル化に対応するための教育に課題が残されている。ただし、5）については本評価開始時から、過去最高の数値となっており、2021年度から卒業論文発表の英語表記化など、英語能力の向上を目指した各取組を実施し、一定の効果は現れている。引き続き、語学教育についてさらにレベルを上げるための方策を検討する必要がある。過去5年間の推移（図1）を見ると、いずれの項目も評価が高まる傾向あるいは、高いまま維持している状況にあることから、ディプロマ・ポリシーに記載された能力を身に付けるための教育が効果的に実施されていることが裏付けられた。

創薬科学科の学生（表1-2、図2）については「身に付けることができた」と評価した

割合が、項目 1) において前年度に引き続き100%であったほか、それ以外の 9 項目全てで前年度よりも上昇した。全項目において70%以上の高水準となっており、特に1)「課題や問題を自ら解決する能力」8)「専門教育等による幅広い知識」9)幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」については「身に付けることができた」と評価した割合が100%であった。また、前年度より特に顕著に上昇した項目としては、5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」(74.4%)、6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」(72.1%)、9)幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」(100%)、10)「地域を志向する意識(富山を通して、地域社会における諸課題を理解し、貢献しようとする意識)」(81.4%)であり、それぞれ15.2、17.0、12.3、16.1ポイント上昇した。過去5年間の推移(図2)を見ると、いずれの項目も評価が高まる傾向あるいは、高いまま維持している状況にあり、特に「十分身に付けることができた」と感じる学生が年々増加していることから、ディプロマ・ポリシーに記載された能力を身に付けるための教育が効果的に実施されていることが裏付けられた。この数年間の教育内容の変化に注目し、今後も引き続き高い自己評価を得られるような教育を実施していく必要がある。

< 2. 薬学部独自項目(表1-3、図3、図4) >

卒業時アンケートにおいては、全学共通項目に加え、薬学部の各学科に特化した内容の項目について、学科別にアンケート調査を実施した。

薬学科では(表1-3、図3)、医療や薬剤師に関連する項目として挙げた12)「健康と疾患に対する洞察力」(88.9%)、13)「薬剤師業務に関する基本的技能」(92.0%)、14)「薬物療法の実践および公衆衛生の向上に寄与する能力」(88.9%)の全てにおいて高い自己評価が示されており、また15)「本学の教育が今後の進路決定に役立った」とする回答も87.3%に達していた。これらはここ数年、高い値のまま推移していることから、6年間の薬剤師養成教育が適切に実施されており、学生の自己評価が良好であることが示された。一方で、無回答が6.3%となっており、アンケートの収集方法などに問題がなかったか引き続き検討する必要がある。無回答を除けば上記の値はさらに高くなると推測される。

創薬科学科では(表1-3、図4)、12)「自然現象に対する知的好奇心・探求心」(95.4%)、13)「創薬科学に関する幅広い学識と実験技術等」(100%)、14)「医薬品創出に取り組むために必要な創造的思考力」(97.6%)について、良好な自己評価が示されており、また15)「本学の教育が今後の進路決定に役立った」とする回答も97.7%であった。これらの結果から、4年間の薬学研究者養成教育が適切に実施され、学生の自己評価が良好であると判断できる。今後も、創薬科学科の学生に対し、創薬研究者として必要な素養を高めることやより専門性の高い教育を提供することを継続していく。

以上、令和6年度卒業時アンケート分析結果から、薬学科と創薬科学科ともに、学生のディプロマ・ポリシー達成度は概ね適正な水準に到達しているものと評価した。また、過去5年間を比較して、全体的に上昇傾向が見られた。引き続き、様々な要因を勘案しつつ、今後の推移を注視していく必要がある。また、語学教育を含めたグローバル化に対応する

ための教育や、研究者としての素養を高めるための教育については、さらに高いレベルで実行するための方策を、今後も継続的に検討していくことが必要である。

（２）令和６年度における修学状況データ分析

＜１．学年別在籍状況（表２－１）＞

ストレート在籍率は、薬学科ではいずれの学年においても87%以上、創薬科学科では80%以上となっており、昨年の調査よりも値は低下していない。例年と同様に、留年者等の過度な発生状況はないと判断できる。

＜２．学年別進級率（表２－２）＞

薬学科の令和６年度データでは、全学年において進級率95%以上と高水準となっていることから、休学・退学・留年者数は、適正な範囲内と判断され、学生に対するフォローアップが適正に行われていると判断できる。

創薬科学科の令和６年度データでは、全学年において進級率が84%以上となっており、また令和２年度以降５年間に渡り同程度の水準が維持されていることから、休学・退学・留年者数は、概ね適正な状況といえる。なお、令和２年から令和５年度までの平均留年者数は10.50人であり、令和６年度の留年者数は全体で５名と低い水準を記録した。令和４年度から創薬科学科の定員が15名減員となった影響もあるものの、学生に対するフォローアップが適正に行われている結果と判断できる。ただし、３年次の退学者は令和６年度に３名おり、これまでよりも多かったことから、今後の動向を注視する必要がある。

＜３．卒業状況（表２－３）＞

薬学科の令和６年度ストレート卒業率は97%と、例年よりも高い水準であり、６年次生の卒業率が100%と前年度96%から改善した。引き続き、６年次生の卒業率を高く維持するための、研究室レベルでの学生のサポートのあり方についても検討を重ねていく必要がある。

創薬科学科は、令和６年度で卒業率98%、ストレート卒業率については78%と、例年をやや下回る結果となった。こちらも卒業率を高く維持するための、学生のサポート体制について、検討を重ねる必要がある。

以上、令和６年度における修学状況データ分析結果から、現状の学生受入れ水準設定やカリキュラム編成、成績評価は、両学科ともに適正に機能していると評価した。

（３）様々な社会状況を踏まえた、教育研究上の目的および３ポリシーの妥当性の検証

昨年度の薬学部自己点検・評価結果に記載の通り、薬学部では令和５年度までに３ポリシーを大幅に改訂し、令和６年度入学生から適用した。具体的には、薬学科において、①「総合型選抜（地域枠）」の導入に対応する３ポリシーの改正、②薬学教育モデル・コア・カリキュラム（令和４年度改訂版）に「薬剤師として求められる10の基本的な資質・能力」が定められたことに伴うディプロマ・ポリシーの修正、③ヒューマニズム教育・医療倫理教育やコミュニケーション能力および自己表現能力を身につけるための教育におい

て、総合的な目標達成度と各科目の目標到達度をレーダーチャートやループリックを用いて形成的かつ総括的に評価することのカリキュラム・ポリシーへの明記、を実施している。また、薬学教育モデル・コア・カリキュラムが適用される薬学科だけでなく、創薬科学科についても同様の修正を行っている。

上記の変更により、教育研究上の目的および3ポリシーは現在の社会状況を踏まえたものとなっており、一貫性・整合性のあるものとして策定されていると言えることから、令和6年度において、これらは妥当なものであり、修正は必要ないと判断した。令和6年度入学者用の薬学科および創薬科学科の教育研究上の目的および3ポリシーを表4-1、4-2に示す。

（４）「コミュニケーション能力醸成のための教育」についての自己点検・評価

薬学部教育において、学生のコミュニケーション能力を醸成することは重要な目的のひとつである。コミュニケーション能力醸成のための教育の現状と課題を把握するために、アンケート調査を実施した。アンケートは2024年度開講の薬学部専門科目（99科目）を対象に、その科目の主担当教員に対して実施し、その科目におけるコミュニケーション能力醸成のための教育内容や評価の実施について、及び、実施に対する課題について回答して貰った。アンケートは2025年1月22日～2月10日の期間にGoogleフォームを用いて実施し、全ての科目について主担当教員から回答を得て（回答率100%）、集計結果を図5～図8のグラフにまとめた。

まず、コミュニケーション能力醸成教育の内容として、ロールプレイング、スモールグループディスカッション、学生同士でのディスカッション、対面での教員から学生への質問・学生から教員への質問、非対面での教員から学生への質問・学生から教員への質問を実施しているかを尋ねた（図5青）。開講科目全体（各グラフの一番右側の項目）でみると、ロールプレイングを実施している科目は8.1%であり、スモールグループディスカッションは32%、学生同士でのディスカッションは41%と、低い割合であった。一方、対面での教員から学生への質問は72.0%、対面での学生から教員への質問は71.0%と、多くの科目で実施されていることが分かった。非対面（Moodleやデバイスを含む）での教員から学生への質問・学生から教員への質問はそれぞれ12.0%、35.0%と低い割合に留まった。実施している項目はないとの回答は5.1%であった（グラフには示していない）。年次（各グラフの左側の項目）や科目区分（中央の項目）で比較すると、対面での教員から学生への質問・学生から教員への質問は年次や科目区分の違いには依らず、ほとんど同じ割合であったが、ロールプレイング、スモールグループディスカッション、学生同士でのディスカッションについては年次が上がるにつれて実施割合が増加しており、また、科目区分の中では臨床薬学と基盤教育において高い傾向があった。本来実施すべき内容（図5赤）を尋ねたところ、開講科目全体でみると、ロールプレイング（9.1%）とスモールグループディスカッション（37.0%）については実施している内容（図5青）との差が小さく、これらの内容をさらに増やす必要性は感じていないことがうかがわれた。一方、学生同士でのディスカッション（56.0%）、対面での教員から学生への質問（82.0%）、対面での学生から教員への質問（80.0%）については、実施している内容よりも9ポイント以上高く、これらを取り入れるべきと考えている教員が多いことが明らかになった。

次に、科目の教育内容がどのような（薬剤師としての・研究者としての・一般社会人としての・学生としての）コミュニケーション能力の醸成に寄与すると思うかを尋ねたところ（図6）、開講科目全体でみると4つの立場のコミュニケーション能力について、いずれも40.0-63.0%の範囲であったが、年次別に見ると、高年次になるほど薬剤師としてのコミュニケーション能力醸成に寄与すると考える割合（図6青）が高くなる傾向があり、科目区分で見ると、衛生薬学、臨床薬学においてその割合が高かった。一方、低年次科目や、基盤教育、物理・化学・生物系薬学科目においては、研究者としてのコミュニケーション能力醸成に寄与すると答えた割合（図6赤）が高かった。

次に、科目において、各学生のコミュニケーション能力の評価を行っているかを尋ねたところ（図3）、開講科目全体でみると、評価していない（図7黄）が76.0%を占めており、ルーブリック表などの評価表を用いて評価している（図7青）は4.0%（臨床前実習と臨床実務実習の4科目のみ）に留まった。ルーブリック表などの評価表を用いずに評価している（図7赤）は20.0%であり、高年次科目や実習科目において比較的高い傾向があった。

次に、科目において、コミュニケーション能力醸成のための教育内容を追加することに対し、障害となる理由を尋ねたところ（図8）、開講科目全体でみると、この科目の中にコミュニケーション能力醸成の教育を追加する時間がない（図8赤）が46.0%、コミュニケーション能力を評価することが難しい（図8緑）が45.0%と高かった。これらは年次や科目区分の違いには依らず、ほとんど同じ割合であった。一方、この科目でコミュニケーション能力醸成を図る必要がない（図8青）は8.1%、コミュニケーション能力醸成の教育の仕方が分からない（図8黄）は4.0%（4科目）であった。

以上まとめると、現状、開講科目全体のうち95.0%の科目において何らかのコミュニケーション能力醸成教育の内容が実施されており、その中でも教員-学生間のコミュニケーション（質問と回答）が多く割合で行われていることが明らかになった。また、学生間のコミュニケーション（ロールプレイング、スモールグループディスカッション、ディスカッション）はより高年次の科目や基盤教育科目で実施されている割合が高く、これらは主に薬剤師としてのコミュニケーション能力醸成に寄与すると認識されていることが判明した。

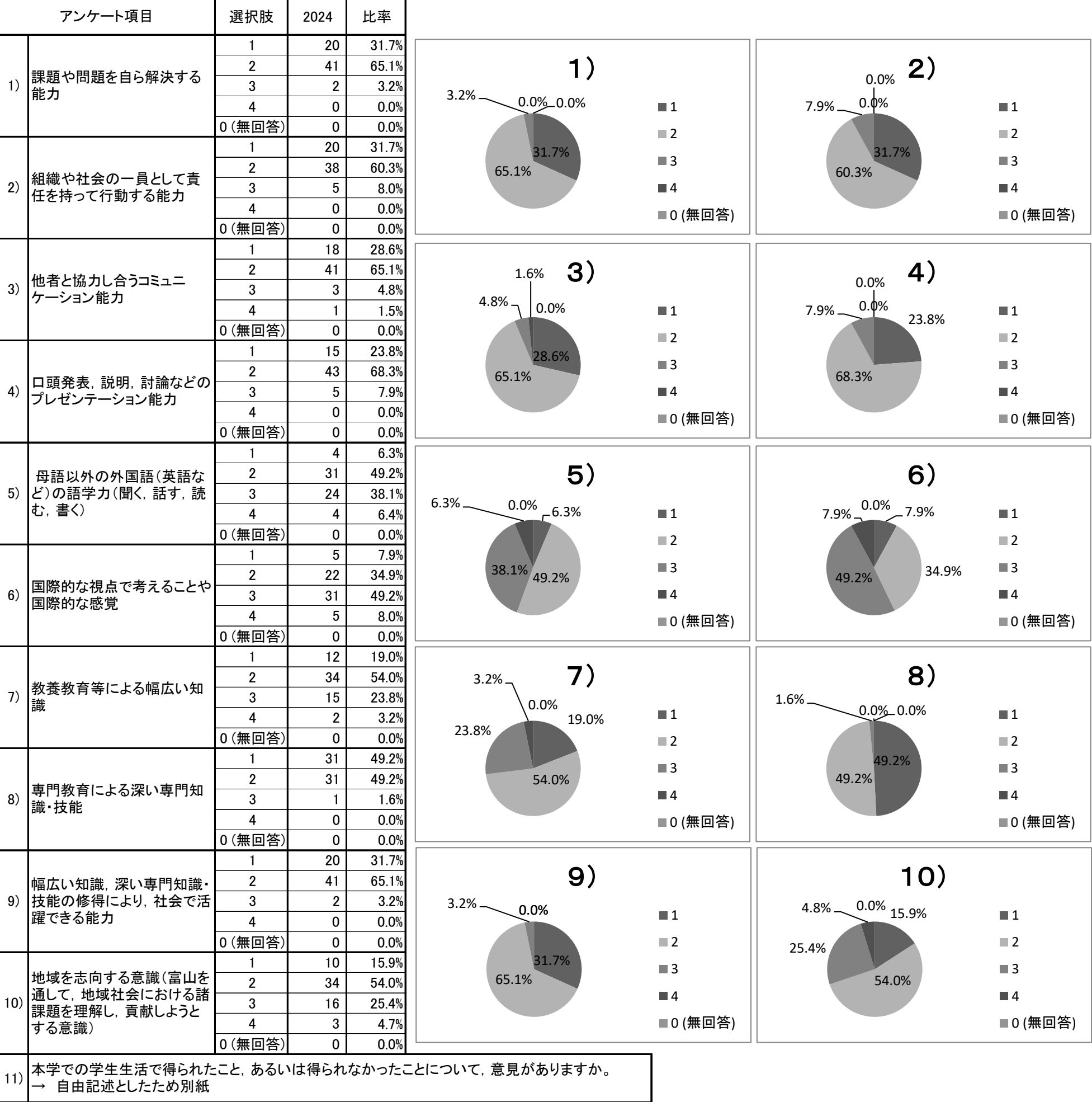
多くの教員は現状においてコミュニケーション能力醸成教育を十分に行っていると認識しており、教員-学生間のコミュニケーション（質問と回答）や学生間のディスカッションについては追加の余地があるものの、時間的な制約からもコミュニケーション能力醸成のための教育内容を追加することは難しいと考えていることが明らかになった。

一方、コミュニケーション能力醸成のための教育を実施する上での問題点は、コミュニケーション能力をいかに評価するかであり、現状、多くの科目で評価が実施されていない状況が浮き彫りとなった。もちろん、大人数クラス編成の講義科目ではルーブリック表などを用いた評価は適切ではなく、またコミュニケーション能力を評価する必要がないと考えている場合も多いと思われるが、多くの教員が「評価が難しい」と考えていることも明らかになった。今後、科目の特徴に応じてコミュニケーション能力の評価が必要な場合には、ルーブリック等、どのような方法で、どのタイミングで評価するかなど、評価のあり方の検討が必要になると考えられる。

表 1－1

卒業時アンケート集計(全学・薬のみ集計)

在学時に、以下の能力等をどの程度身につけることができたと思いますか。

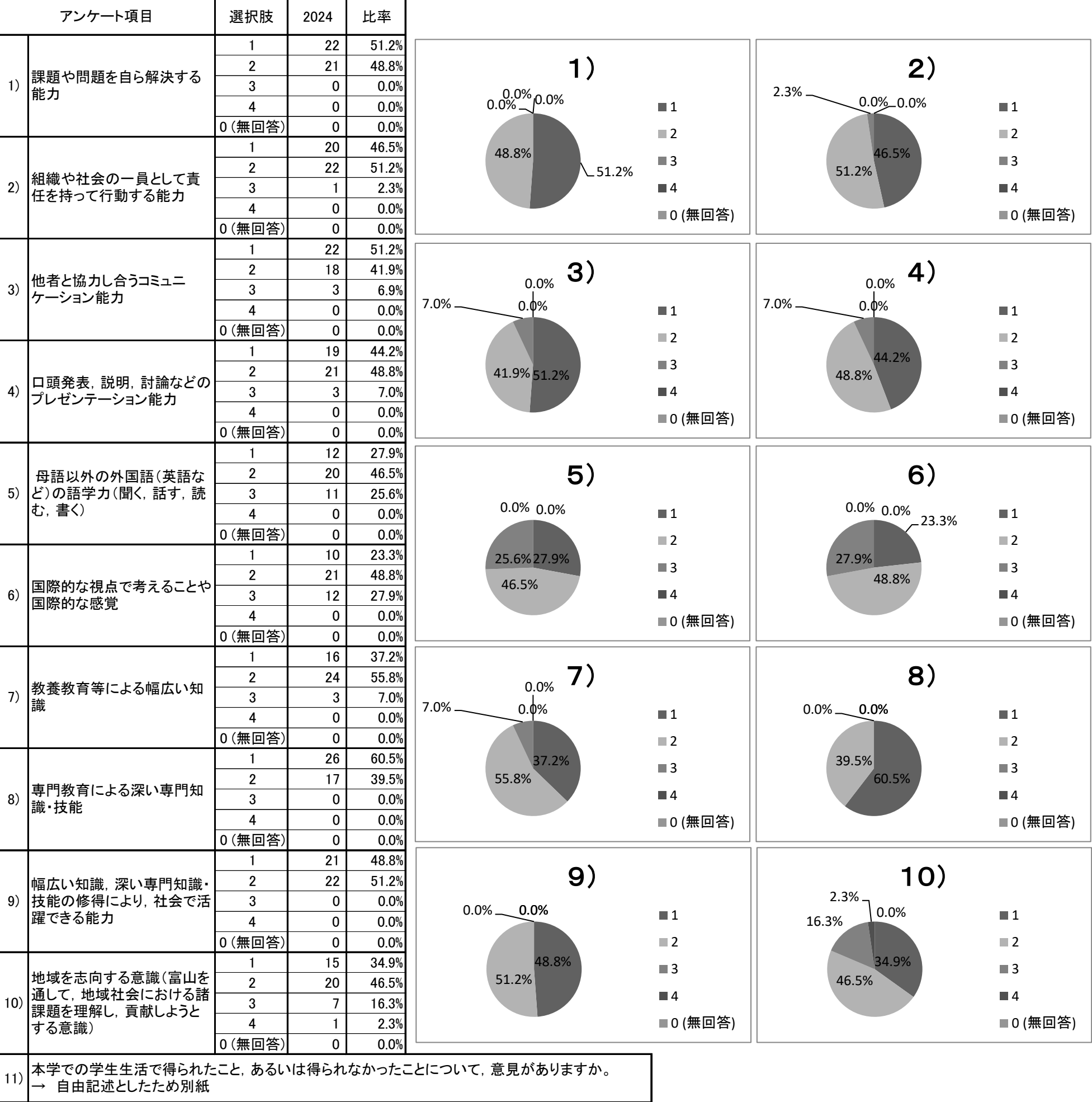


1. 十分身に付けることができた 2. ある程度身に付けることができた
3. あまり身に付けることができなかった 4. 全く身に付けることができなかった

表 1－2

卒業時アンケート集計(全学・創薬のみ集計)

在学時に、以下の能力等をどの程度身につけることができたと思いますか。

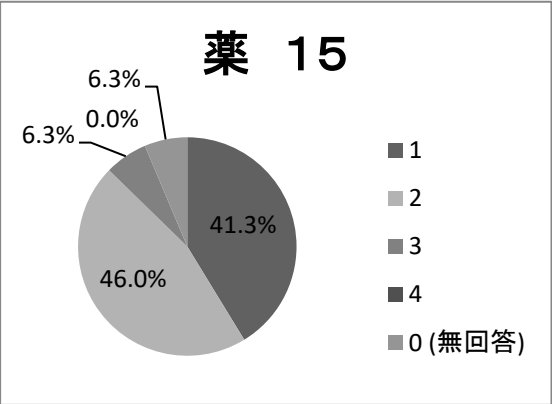
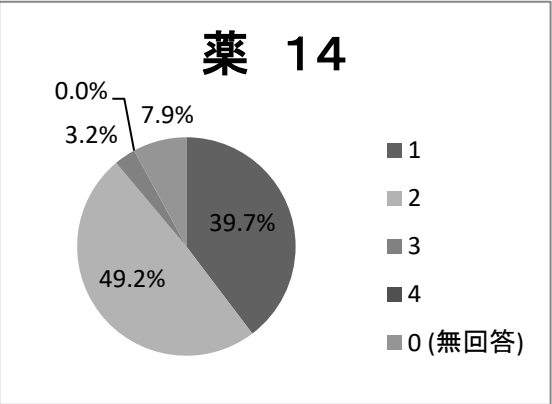
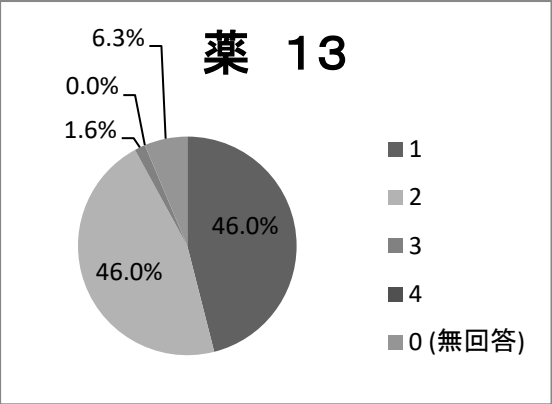
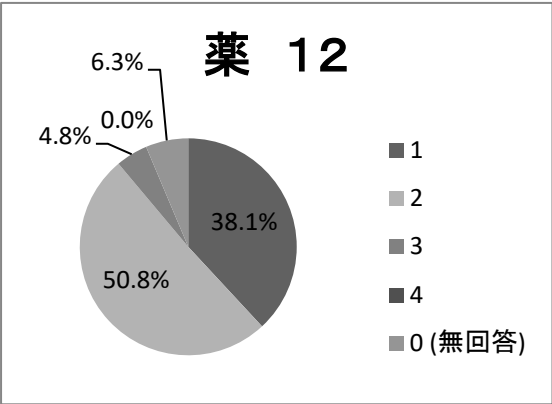


1. 十分身に付けることができた 2. ある程度身に付けることができた
3. あまり身に付けることができなかった 4. 全く身に付けることができなかった

卒業時アンケート集計(薬学独自)

薬学科

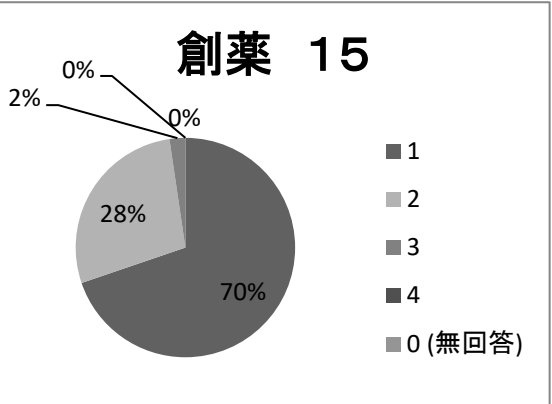
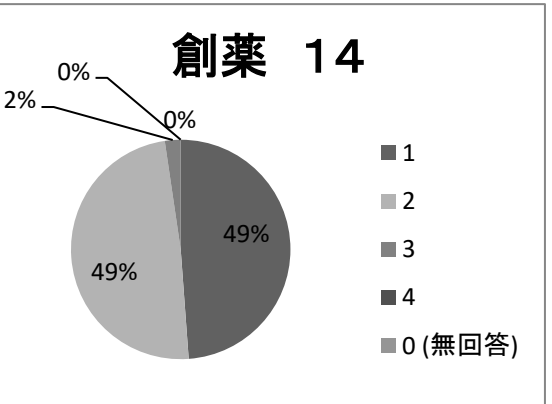
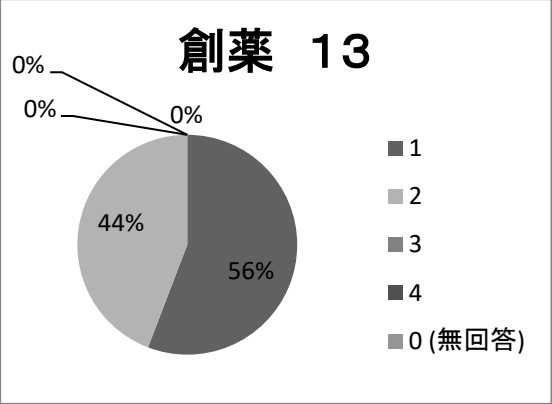
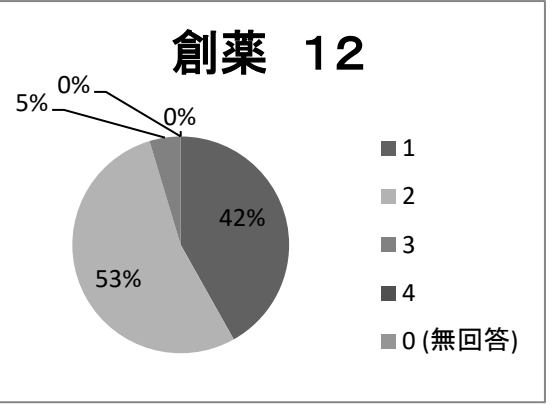
アンケート項目		選択肢	2024	比率
12	健康と疾患に対する洞察力を身に付けることができましたか	1	24	38.1%
		2	32	50.8%
		3	3	4.8%
		4	0	0.0%
		0(無回答)	4	6.3%
13	薬剤師業務に関する基本的技能を身に付けることができましたか	1	29	46.0%
		2	29	46.0%
		3	1	1.7%
		4	0	0.0%
		0(無回答)	4	6.3%
14	薬物療法の実践および公衆衛生の向上に寄与する能力を身に付けることができましたか	1	25	39.7%
		2	31	49.2%
		3	2	3.2%
		4	0	0.0%
		0(無回答)	5	7.9%
15	本学の教育が今後の進路決定に役立ったと思いますか	1	26	41.3%
		2	29	46.0%
		3	4	6.4%
		4	0	0.0%
		0(無回答)	4	6.3%



1. 十分身に付けることができた 2. ある程度身に付けることができた
3. あまり身に付けることができなかった 4. 全く身に付けることができなかった

創薬科学科

アンケート項目(創薬科学科)		選択肢	2024	比率
12	自然現象に対する知的的好奇心・探求心を身に付けることができましたか	1	18	41.9%
		2	23	53.5%
		3	2	4.6%
		4	0	0.0%
		0(無回答)	0	0.0%
13	創薬科学に関する幅広い学識と実験技術等を身に付けることができましたか	1	24	55.8%
		2	19	44.2%
		3	0	0.0%
		4	0	0.0%
		0(無回答)	0	0.0%
14	医薬品創出に取り組むために必要な創造的思考力を身に付けることができましたか	1	21	48.8%
		2	21	48.8%
		3	1	2.4%
		4	0	0.0%
		0(無回答)	0	0.0%
15	本学の教育が今後の進路決定に役立ったと思いますか	1	30	69.8%
		2	12	27.9%
		3	1	2.3%
		4	0	0.0%
		0(無回答)	0	0.0%



1. 十分身に付けることができた 2. ある程度身に付けることができた
3. あまり身に付けることができなかった 4. 全く身に付けることができなかった

【表2-1】R7年4月における学年別在籍状況

(薬学科)

学年		1年	2年	3年	4年	5年	6年
入学時の学生数(A)		73	70	72	70	58	55
R7年4月時の在籍学生数(B)		75	71	71	70	60	49
過年度生の数(C)	留年による者	2	3	1	3	4	1
	休学による者	0	0	1	0	0	0
転学科者の数(D)		0	0	0	0	1	0
ストレート在籍者数(E = B-C-D)		73	68	69	67	55	48
ストレート在籍率(E/A)		1.00	0.97	0.96	0.96	0.95	0.87
過年度在籍率(C/B)		0.03	0.04	0.03	0.04	0.07	0.02

(創薬科学科)

学年		1年	2年	3年	4年
入学時の学生数(A)		40	39	35	40
R7年4月時の在籍学生数(B)		41	41	41	36
過年度生の数(C)	留年による者	1	2	6	4
	休学による者	0	1	1	0
転学科者の数(D)		0	0	0	0
ストレート在籍者数(E = B-C-D)		40	38	34	32
ストレート在籍率(E/A)		1.00	0.97	0.97	0.80
過年度在籍率(C/B)		0.02	0.07	0.17	0.11

表 2 - 2

【表2-2】R2年度～R6年度における学年別進級率

(薬学科)

		R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
1年次	在籍者数	56	60	73	72	73
	休学者数	0	0	0	0	0
	退学者数	0	0	1	0	2
	留年者数	2	3	0	3	2
	進級率	0.96	0.95	0.99	0.96	0.95
2年次	在籍者数	60	54	57	73	71
	休学者数	0	0	0	0	0
	退学者数	0	0	0	0	0
	留年者数	0	0	1	2	2
	進級率	1.00	1.00	0.98	0.97	0.97
3年次	在籍者数	60	65	55	59	73
	休学者数	1	0	0	1	1
	退学者数	0	1	0	0	2
	留年者数	4	1	3	1	1
	進級率	0.92	0.97	0.95	0.97	0.95
4年次	在籍者数	65	57	64	53	61
	休学者数	1	0	1	3	0
	退学者数	1	0	0	1	0
	留年者数	1	1	0	0	1
	進級率	0.91	0.98	0.98	0.92	0.98
5年次	在籍者数	51	63	56	63	49
	休学者数	1	0	0	0	0
	退学者数	0	0	0	0	0
	留年者数	0	0	0	0	0
	進級率	0.98	1.00	1.00	1.00	1.00

在籍者数は当該年度始め、休学、退学、留年者数は当該年度末の数値

(創薬科学科)

		R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
1年次	在籍者数	59	57	47	41	41
	休学者数	0	0	1	0	0
	退学者数	1	1	2	3	1
	留年者数	7	7	5	2	1
	進級率	0.86	0.86	0.83	0.88	0.95
2年次	在籍者数	56	54	53	44	39
	休学者数	0	2	0	1	1
	退学者数	2	1	1	1	0
	留年者数	3	2	5	2	1
	進級率	0.91	0.91	0.89	0.91	0.95
3年次	在籍者数	48	53	53	47	43
	休学者数	2(但し進級)	1(但し進級)	0	1	1
	退学者数	1	1	1	0	3
	留年者数	2	4	1	2	3
	進級率	0.94	0.91	0.96	0.94	0.84

在籍者数は当該年度始め、休学、退学、留年者数は当該年度末の数値

【表2-3】R2年度～R6年度における卒業状況

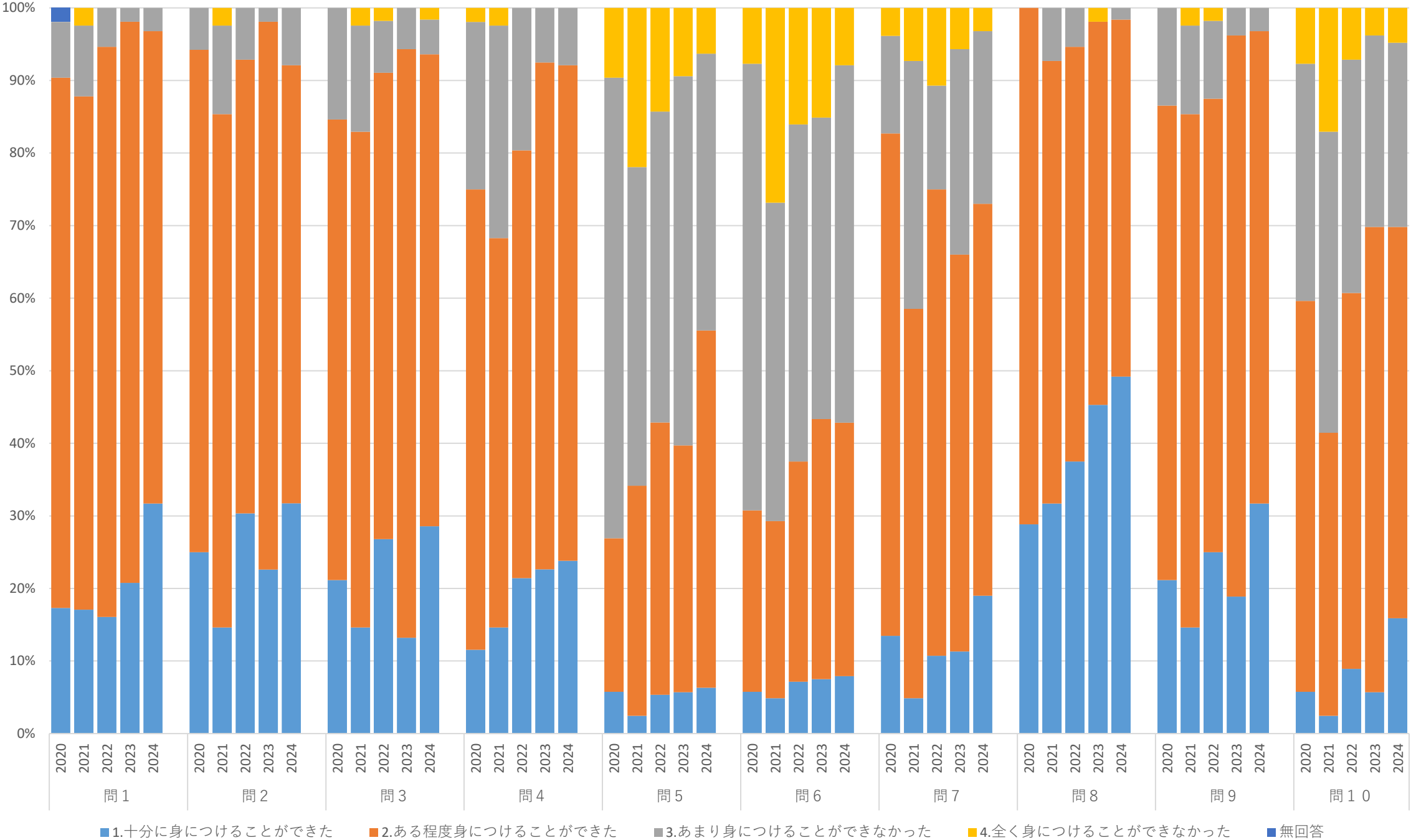
(薬学科)

		R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
6年次生(年度末)の在籍学生数(A)		54	50	63	56	65
卒業者数(B)		54	50	63	54	65
卒業率(B/A)		1.00	1.00	1.00	0.96	1.00
卒業までに要した年数	6年(C)	47	46	50	50	57
	7年	5	3	6	4	7
	8年	0	0	4	0	1
	9年以上	2	1	3	0	0
6年次生(C)が入学した年度の実入学者数(D)		56	55	57	60	59
ストレート卒業率(C/D)		0.84	0.84	0.88	0.83	0.97

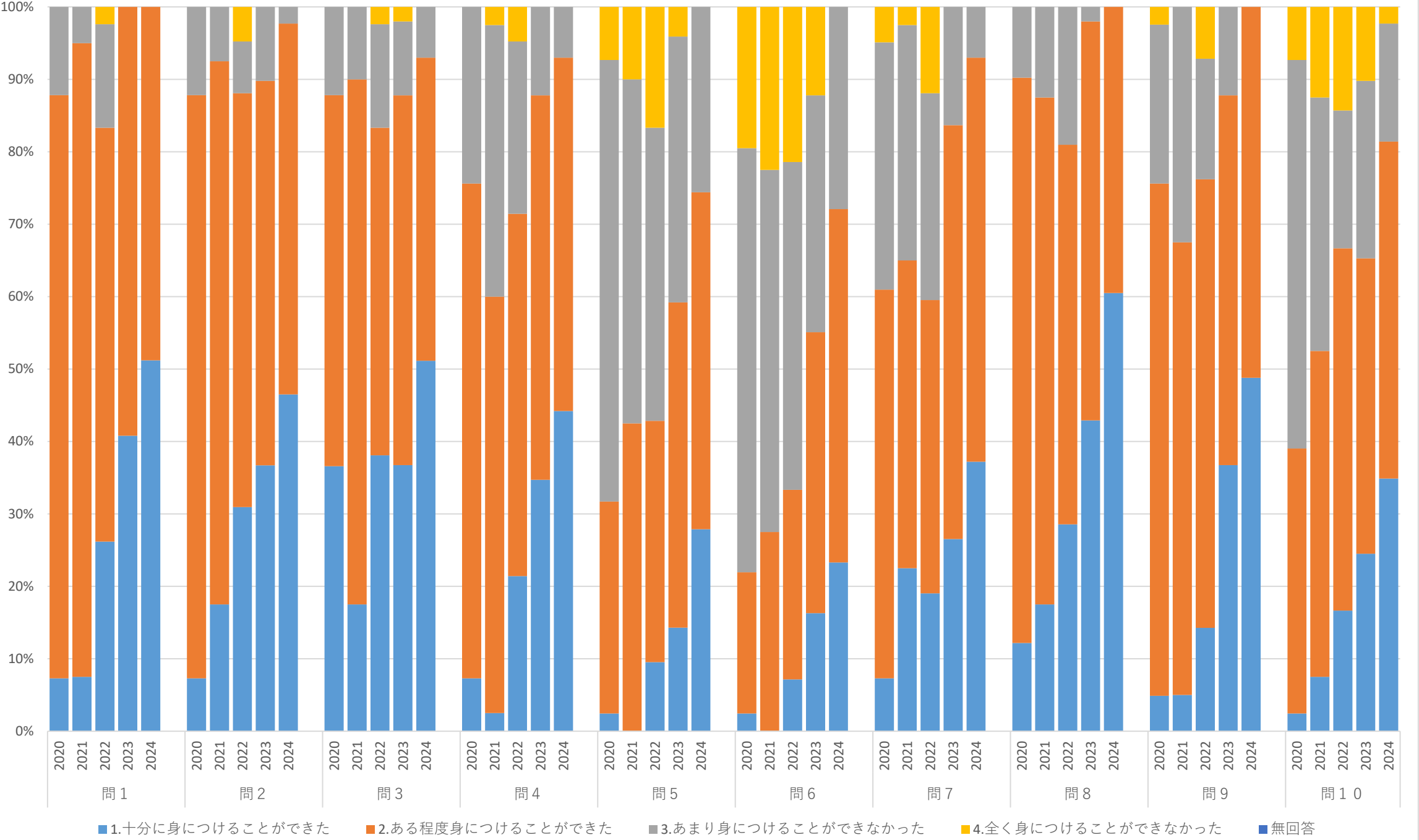
(創薬科学科)

		R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度
4年次生(年度末)の在籍学生数(A)		51	49	45	51	45
卒業者数(B)		50	49	42	50	44
卒業率(B/A)		0.98	1.00	0.93	0.98	0.98
卒業までに要した年数	4年(C)	45	42	41	46	39
	5年	4	4	1	3	4
	6年	0	1	0	1	1
	7年以上	1	2	0	0	1
4年次生(C)が入学した年度の実入学者数(D)		54	52	51	55	50
ストレート卒業率(C/D)		0.83	0.81	0.80	0.84	0.78

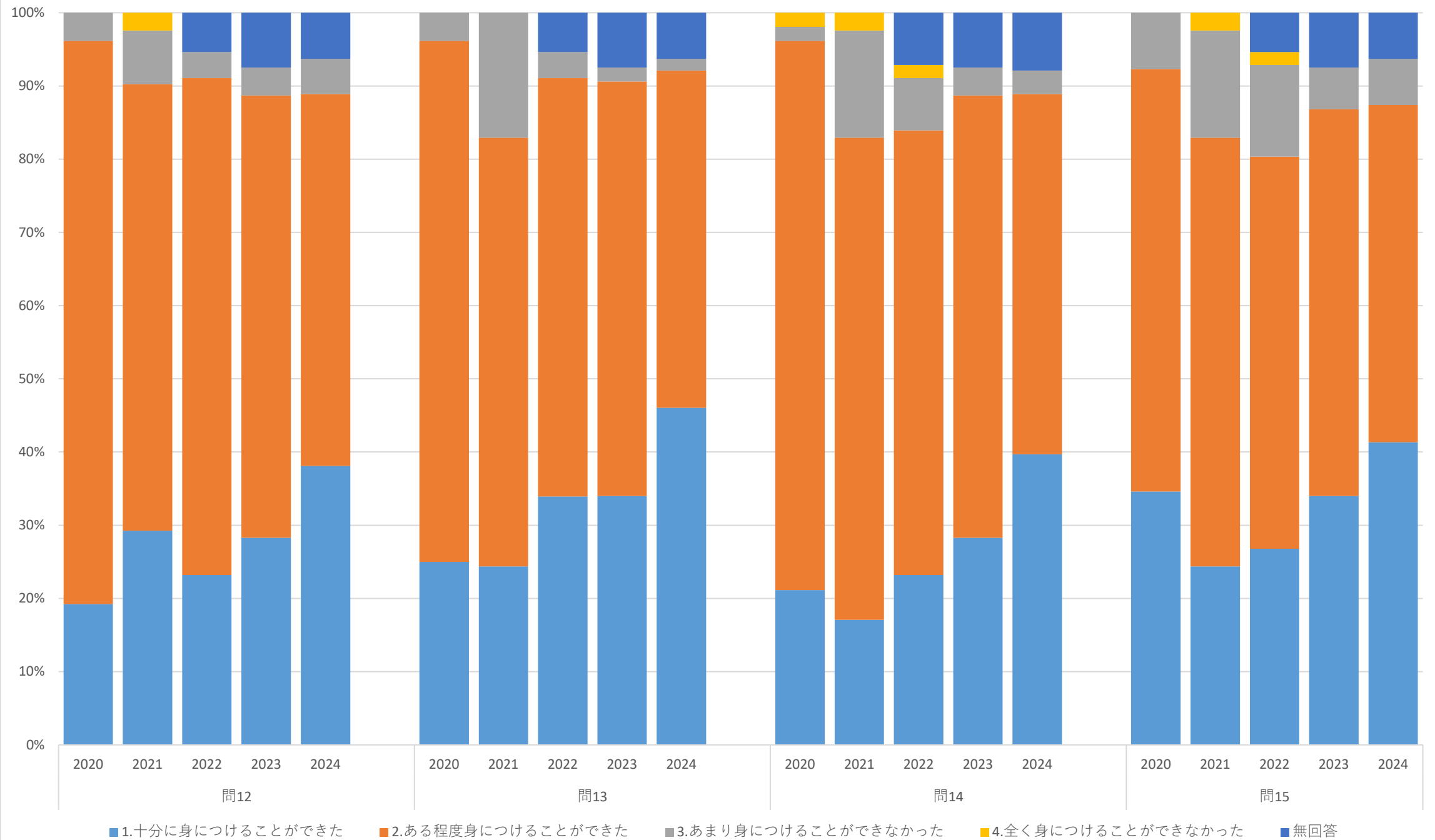
【薬学科】卒業時アンケート（全学項目）結果推移



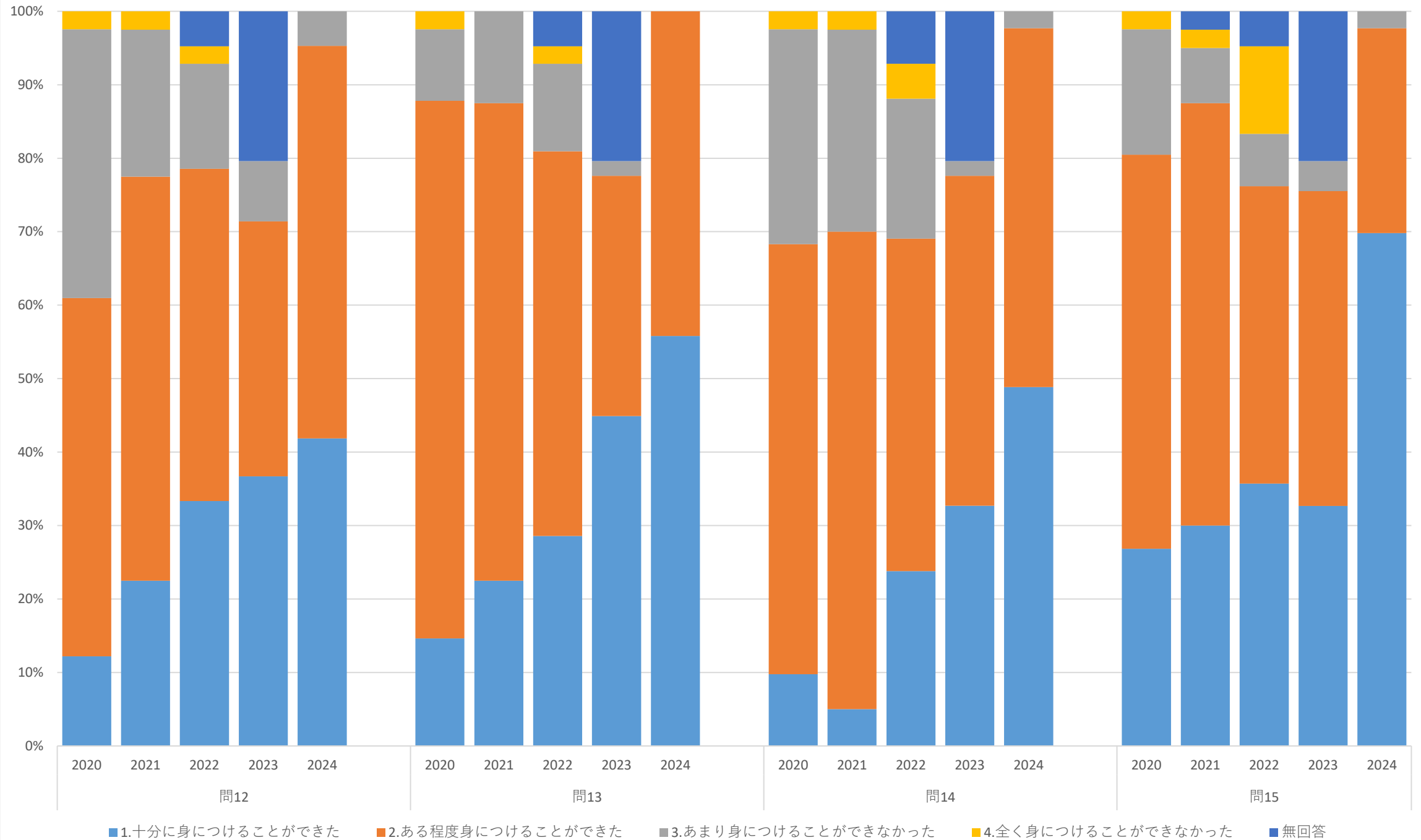
【創薬科学科】卒業時アンケート（全学項目）結果推移



【薬学科】卒業時アンケート（独自項目）結果推移



【創薬科学科】卒業時アンケート（独自項目）結果推移



大学の目的（学則 第3条）		学部(学科)の教育研究上の目的（学部規則等から抜粋）	
本学は、地域と世界に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い、人間尊重の精神を基本に高い使命感と創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化、人間社会と自然環境との調和的発展に寄与することを目的とする。		薬学部では、薬の理解と薬学研究を通じて、人類の健康、福祉、衛生及び健全な社会環境の保全に貢献できる人材を育成することを目的とする。 薬学科では、広い視野と高度な知識と研究力を持ち、和漢薬を含めた広範な東西医療分野で活躍し、医療に関する社会的ニーズに対応できる薬剤師などを育成することを目的とする。	
ディプロマ・ポリシー		カリキュラム・ポリシー	アドミッション・ポリシー
【卒業認定・学位授与方針】 薬学科では、人類の健康、福祉、衛生及び健全な社会環境の保全と向上に貢献できる人材を育成するため、定められた教育課程で十分な学修成果を上げ、以下に示す「幅広い知識」、「専門的学識」、「問題発見・解決力」、「社会貢献力」、「コミュニケーション能力」を身に付けた者に学士(薬学)を授与する。		【教育課程編成方針】 薬学科では、卒業認定・学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)に掲げる5つの能力を学修するため、教養教育科目及び専門教育科目を体系的に編成し、地域及び国内外の病院、企業、行政などから必要とされる薬剤師として活躍するための教育を実施する。 【教育課程実施方針】 6年間の学修を通じて、薬剤師として必要な教養と基礎科学、基礎薬学及び医療薬学の多岐にわたる専門分野での学識を深めるためのカリキュラムを編成する。 ・1年次においては、教養教育の卒業要件単位を修得するための講義・実習・実技科目を主体とし、専門分野への導入教育も並行して実施するとともに、地域と連携した講義や早期体験学習を行う。 ・2年次においては、物理、化学、生物系の基礎科学を主とした講義科目と、基礎科学系及び医療系の基礎薬学実習を実施する。 ・3年次においては、生物、薬剤、薬理、衛生、医療系分野を主とした講義科目、及びとやま薬学演習を実施するとともに、地域と連携した講義、演習、インターンシップを実施する。また、卒業研究を開始する。 ・4年次においては、医療系分野の講義科目と、臨床実務実習に備えて臨床前実習を実施する。また、卒業研究を継続する。 ・5年次においては、薬局・病院における臨床実務実習を実施する。また、卒業研究を継続する。 ・6年次においては、卒業研究を主として実施するとともに、基礎薬科学の反復教育とアドバンス教育を実施する。また、希望者に対して短期海外派遣を行う演習科目を実施する。	【入学者受入れ方針】 薬の理解と薬学研究を通じて、人類の健康、福祉、衛生及び健全な社会環境の保全に貢献できる人材を育成するに当たり、薬学科では、次の人材を求める。 ・薬剤師としての高度な学識と職能を得たい人 ・医薬品の研究や臨床開発に携わることで人類と社会に貢献したい人 ・東西医学の融合による統合医療の実践を目指す人 ・医療や保健衛生の分野で社会に貢献したい人 ・地域や国内外の医療、研究、行政に薬剤師として貢献したい人 【入学者選抜の基本方針(入試種別とその評価方法)】 一般選抜(前期日程) 大学入学共通テストでは、基礎学力を評価する。 本学では、「数学」及び「理科」を課して、数学力、理解力、応用力、表現力、科学的思考力等を評価する。 一般選抜(後期日程) 大学入学共通テストでは、基礎学力を評価する。 本学では、「小論文」及び「面接」を課して、論理的思考力、文章表現力、学習意欲、適性等を評価する。 特別入試(学校推薦型選抜、帰国生徒選抜) 本学では、「書類審査」、「小論文・適性検査」及び「面接」を課して、学習到達度、科学的思考力、文章表現力、学習意欲、適性等を評価する。 総合型選抜(研究者養成枠) 本学では、第1次選抜として、書類審査(自己推薦書、調査書)及び「小論文・適性検査」を課して、学習到達度、自己分析力、積極性、薬学を学ぶために必要な教科・科目の基礎学力を評価する。第1次選抜合格者に対して、「面接」及び「プレゼンテーション」を課し、志望動機、薬学を学ぶ目的意識、大学院への進学意欲、探究心に加え、論理的思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性、協調性を総合的に評価する。 総合型選抜(地域枠) 本学では、第1次選抜として、書類審査(自己推薦書、調査書)及び「小論文・適性検査」を課して、学習到達度、自己分析力、積極性、薬学を学ぶために必要な教科・科目の基礎学力を評価する。第1次選抜合格者に対して、「面接」及び「プレゼンテーション」を課し、志望動機、薬学を学ぶ目的意識、地域医療に対する理解、富山県内への貢献意欲に加え、公正さ、責任感、判断力、積極性、主体性、協働性、協調性を総合的に評価する。 私費外国人留学生選抜 日本留学試験では、日本語、理科及び数学の基礎的学力を評価する。 本学では、「数学」及び「理科」を課して、数学力、理解力、応用力、表現力、科学的思考力等を評価し、「面接」により学習意欲、適性等を評価する。 【入学前に学習すべきこと】 薬学は、広範で多様な学問分野から成っているため、入学までに、化学、物理学、生物学、数学、語学の基礎学力を付けておくことが望ましい。
【学修成果の到達目標】		【学修内容、学修方法及び学修成果の評価方法】	【求める資質・能力】
幅広い知識	【学修成果】 人文科学・社会科学・自然科学・健康科学の諸分野を学際的に捉え、多様な文化的・歴史的背景を持った地域や社会を理解し、行動する能力を身に付けている。また、「くすり」の観点からの地域や国内外の歴史と現状について理解し、医療、研究、行政に貢献する能力を身に付けている。	【学修内容】 幅広い視野から物事を捉え、高い倫理性に基づいた判断ができる人材に成長するため、教養教育において人文科学・社会科学(語学を含む)の講義科目を学修する。また、薬学専門教育への橋渡しとして、自然科学・生命健康科学系の理系基盤教育科目を学修する。さらに、地域と連携した講義科目、演習科目を学習する。 【学修方法】 講義科目では理解度の向上を図るためアクティブラーニングで学修する。語学では少人数授業で、また一部の理系基盤教育科目では理解度に応じたクラス編成で学修する。 【学修成果の評価方法】 試験やレポート等をもとに、シラバスに定めた評価方法で成績評価を行う。学生個々の「幅広い知識」の修得度を関連科目の成績から算出し、レーダーチャートで可視化するとともに、ルーブリックによる到達度評価を取り入れることで学修成果の形成的評価及び総括的評価を行う。	【求める資質・能力】 教養教育を受けるにふさわしい基礎知識を身に付けている。 教養教育に対する深い関心と学ぶ意欲を持っている。 「くすりの富山」としての地域に対する関心と貢献意欲を持っている。
	【到達指標】 教養教育科目の卒業要件単位を修得していること。		
専門的学識	【学修成果】 基礎科学に裏打ちされた、医薬品等の安全性と有効性に関する深い学識、情報・科学技術に関する専門知識と規範意識、及び薬剤師業務に必要な基本的技能を修得し、和漢薬を含む薬物療法の実践及び公衆衛生の向上に寄与する能力を身に付けている。	【学修内容】 実践的な薬学を学ぶために必要な、物理、化学、生物系の基礎科学教育を重点的に学修する。その学修成果を土台とし、薬剤、薬理、衛生、医療系講義を体系的に学修し、さらに医療データサイエンス科目や実務経験者による実践的講義等を学修する。各専門分野の実習では、体験に基づくより深い学修と実験技術を修得する。また、病院及び薬局における臨床実務実習で、薬剤師業務に必要な技能を修得する。 【学修方法】 理解度の向上を図るため、視聴覚教材等を随時使用した講義で学修する。また、授業外学修を推進し、自ら学ぶ力を養う。 【学修成果の評価方法】 試験やレポート等をもとに、シラバスに定めた評価方法で成績評価を行う。年次進捗とともに体系的な学習が必要になることから、各年次において次年次への進級要件単位数を設定している。学生個々の「専門的知識」の修得度を関連科目の成績から算出し、レーダーチャートで可視化するとともに、ルーブリックによる到達度評価を取り入れることで学修成果の形成的評価及び総括的評価を行う。	【求める資質・能力】 薬学を学ぶために必要な基礎知識、語学力、理解力、論理的思考能力を身に付けている。
	【到達指標】 専門教育科目(講義及び実習)の卒業要件単位を修得し、薬剤師として必要な知識・技能を身に付けていること。		
問題発見・解決力	【学修成果】 健康と疾患に対する深い洞察力を持って、地域や国内外における薬学関連分野の問題や課題に取り組む、学術情報の収集・分析及び実験等の研究活動を通して得られる結果を論理的に考察し、解決に向けて議論・発表できる能力を身に付けている。	【学修内容】 学修した専門知識を最大限活用して、医薬品に関する調査・分析や地域医療・産業に関する課題抽出を行う能力を、とやま薬学演習で学修する。また、卒業研究では、各研究室において学生ごとに課題を設定し、その解決に向けて研究活動を行う。得られた成果の発表会を行い、効果的なプレゼンテーションや質疑応答に必要な技術・能力を修得する。 【学修方法】 アクティブラーニングを導入した学修や、教員の指導の下、学生が主体的に調査・分析・実験等の研究を行う。 【学修成果の評価方法】 作成した卒業論文と、発表会における発表と質疑応答をもとに、シラバスに定めた評価方法で成績評価を行う。その評価において、ルーブリックによるパフォーマンス評価を取り入れる。学生個々の「問題発見・解決力」の修得度を関連科目の成績から算出し、レーダーチャートで可視化するとともに、ルーブリックによる到達度評価を取り入れることで学修成果の形成的評価及び総括的評価を行う。	【求める資質・能力】 地域や国内外における、薬学関連分野の課題に対し、調査・分析・実験等により解決策を導き出す意欲を持っている。
	【到達指標】 とやま薬学演習及び卒業研究において、学修成果に挙げる能力を修得していること。		
社会貢献力	【学修成果】 医療人としての規律、倫理等を守り、患者及び医療に関わる全ての人々の立場を理解しながら、薬剤師として果たすべき役割を認識し、チーム医療・地域保健医療に対して責任ある行動をとる能力を身に付けている。	【学修内容】 薬学概論では、初年次教育として研究室訪問や薬局・病院見学を行うとともに、薬事行政について学ぶ。 医療学入門において、早期臨床体験の一環として介護体験実習及び心臓蘇生講習を受講する。 各学年に配置された医療人教育に関わる科目、及び基礎薬学実習や臨床実務実習でのグループ活動を通して責任感や協調性など、医療人として必要な社会性を修得する。また、臨床実務実習を通じて、医療現場における薬剤師の果たす役割を学修する。 【学修方法】 地域や国内外を意識した講義や各種実習、学外での体験学修、及び臨床実務実習を行う。 【学修成果の評価方法】 レポートや実習評価表をもとに、シラバスに定めた評価方法で成績評価を行う。その評価において、ルーブリックによるパフォーマンス評価を取り入れる。学生個々の「社会貢献力」の修得度を関連科目の成績から算出し、レーダーチャートで可視化するとともに、ルーブリックによる到達度評価を取り入れることで学修成果の形成的評価及び総括的評価を行う。	【求める資質・能力】 高度な学識と職能を有する薬剤師として、社会に貢献する意欲を持っている。 医薬品の研究や臨床開発に携わることで、人類と社会に貢献する意欲を持っている。 医療や保健衛生の分野で、地域や国内外に貢献する意欲を持っている。
	【到達指標】 薬学概論、医療人教育に関わる科目、基礎薬学実習及び臨床実務実習の単位を修得し、地域や国内外に貢献する医療人として責任ある行動をとることの重要性を理解していること。		
コミュニケーション能力	【学修成果】 他者との積極的な意思疎通を図り、共に学ぶ姿勢を心がけることで、豊かな人間関係を築きながら自己の成長へとつなげることに努め、地域や国内外における異なる考えや言語文化を有する人々の立場を理解し、誠実かつ柔軟なコミュニケーションを取る能力を身に付けている。	【学修内容】 講義や実習での同級生とのコミュニケーションを通して、友人や仲間と豊かな人間関係を構築しながら、学識向上を図る。また、研究室での研究活動や臨床実務実習を通して、指導教員、他の学生(大学院生や留学生を含む)、地域の指導薬剤師、製薬企業人及び行政担当者や国内外の企業人、研究者等との協力関係や信頼関係を深め、業務遂行上必要なコミュニケーション能力を向上させる。 【学修方法】 アクティブラーニング形式の講義、実習、とやま薬学演習におけるグループワーク、研究室での研究活動、及び臨床実務実習を行う。 【学修成果の評価方法】 試験又は発表会を実施し、その成果をもとに、シラバスに定めた評価方法で成績評価を行う。その評価において、ルーブリックによるパフォーマンス評価を取り入れる。学生個々の「コミュニケーション能力」の修得度を関連科目の成績から算出し、レーダーチャートで可視化するとともに、ルーブリックによる到達度評価を取り入れることで学修成果の形成的評価及び総括的評価を行う。	【求める資質・能力】 地域や国内外の多様な社会の中で、相手に働きかけて意思の疎通を図り、豊かな人間関係を築きながら自己を成長させていく意欲を持っている。
	【到達指標】 とやま薬学演習、基礎薬学実習、臨床実務実習及び卒業研究の単位を修得し、指導教員、他の学生(大学院生や留学生を含む)、地域の指導薬剤師、製薬企業人及び行政担当者や国内外の企業人、研究者等と良好な人間関係を構築していること。		

大学の目的（学則 第3条）		学部(学科)の教育研究上の目的（学部規則等から抜粋）			
本学は、地域と世界に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育および研究を行い、人間尊重の精神を基本に高い使命感和創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化、人間社会と自然環境との調和的発展に寄与することを目的とする。		薬学部では、薬の理解と薬学研究を通じて、人類の健康、福祉、衛生及び健全な社会環境の保全に貢献できる人材を育成することを目的とする。 創薬科学科では、広い視野と高度な知識と研究力を持ち、創薬・ライフサイエンス・和漢薬を含めた東西医薬の関連分野を中心に活躍する研究者・技術者などを育成することを目的とする。			
ディプロマ・ポリシー		カリキュラム・ポリシー		アドミッション・ポリシー	
【卒業認定・学位授与方針】 創薬科学科では、人類の健康、福祉、衛生及び健全な社会環境の保全と向上に貢献できる人材を育成するために定められた教育課程で、十分な学修成果を上げ、以下に示す「幅広い知識」、「専門的学識」、「問題発見・解決力」、「社会貢献力」、「コミュニケーション能力」を身に付けた者に学士（薬科学）を授与する。		【教育課程編成方針】 創薬科学科では、卒業認定・学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる5つの能力を学修するため、教養教育科目及び専門教育科目を体系的に編成する。 【教育課程実施方針】 ・4年間の学修を通じて薬学研究者として必要な教養と物理、化学、生物、医療の専門分野での学識を深めるためのカリキュラムを編成する。 ・1年次においては、教養教育の卒業要件単位を修得するための講義・実習・実技科目を主体とし、専門分野への導入教育も並行して実施する。 ・2年次においては、物理、化学、生物系の基礎科学を主とした講義科目と、基礎科学系及び医療系の基礎薬学実習を実施する。後期からは、創薬・和漢薬・脳機能で特徴付けられる各専門コースに分属し、特別専門実習を実施する。 ・3年次においては、生物、薬剤、薬理、衛生、医療系分野を主とした講義科目及び総合薬学演習を実施する。また、卒業研究を開始する。 ・4年次においては、卒業研究を主として実施する。		【入学者受入れ方針】 薬の理解と薬学研究を通じて、人類の健康、福祉、衛生及び健全な社会環境の保全に貢献できる人材を育成するに当たり、創薬科学科では、次の人材を求める。 ・薬学関連の研究分野で国際的に活躍したい人 ・新薬の研究に携わることで人類と社会に貢献したい人 ・東西医薬学の融合による医薬品の創出を目指す人 ・疾患に関連する現象や物質に対して興味と研究心を有している人 ・生体メカニズムの解明やそのための新しい方法論の開拓に挑戦したい人 【入学者選抜の基本方針（入試種別とその評価方法）】 一般選抜(前期日程) 大学入学共通テストでは、基礎学力を評価する。 本学では、「数学」及び「理科」を課して、数学力、理解力、応用力、表現力、科学的思考力等を評価する。 一般選抜(後期日程) 大学入学共通テストでは、基礎学力を評価する。 本学では、「小論文」及び「面接」を課して、論理的思考力、文章表現力、学習意欲、適性等を評価する。 特別入試(学校推薦型選抜、帰国生徒選抜) 本学では、「書類審査」、「小論文・適性検査」及び「面接」を課して、学習到達度、科学的思考力、文章表現力、学習意欲、適性等を評価する。 私費外国人留学生選抜 日本留学試験では、日本語力、理科及び数学の基礎的学力を評価する。 本学では、「数学」及び「理科」を課して、数学力、理解力、応用力、表現力、科学的思考力等を評価し、「面接」により学習意欲、適性等を評価する。 【入学前に学習すべきこと】 薬学は、広範で多様な学問分野から成っているため、入学までに、化学、物理学、生物学、数学、語学の基礎学力を付けておくことが望ましい。	
【学修成果の到達目標】		【学修内容、学修方法および学修成果の評価方法】		【求める資質・能力】	
幅広い知識	【学修成果】 人文科学・社会科学・自然科学・健康科学の諸分野を学際的に捉え、多様な文化的・歴史的背景を持った地域や社会を理解し、行動する能力を身に付けている。 【到達指標】 教養教育科目の卒業要件単位を修得していること。	【学修内容】 幅広い視野から物事を捉え、高い倫理性に基づいた判断ができる人材に成長するため、教養教育において人文科学・社会科学（語学を含む）の講義科目を学修する。また、薬学専門教育への橋渡しとして、自然科学・生命健康科学系の理系基盤教育科目を学修する。 【学修方法】 講義科目では理解度の向上を図るためアクティブラーニングで学修する。語学では少人数授業で、また一部の理系基盤教育科目では理解度に応じたクラス編成で学修する。 【学修成果の評価方法】 試験やレポート等をもとに、シラバスに定めた評価方法で成績評価を行う。学生個々の「幅広い知識」の修得度を関連科目の成績から算出し、レーダーチャートで可視化するとともに、ルーブリックによる到達度評価を取り入れることで学修成果の形成的評価及び総括的评价を行う。		【求める資質・能力】 教養教育を受けるにふさわしい基礎知識を身に付けている。 教養教育に対する深い関心と学ぶ意欲を持っている。	
	【学修成果】 物理学、化学、生物学等に基づき、和漢薬を含む伝統医学から先端薬学までの創薬科学に関する幅広い学識、及び情報・科学技術に関する専門知識と規範意識を修得・展開し、医薬品創出を目指した研究・開発に取り組むために必要な創造的思考力と実験技術等を身に付けている。 【到達指標】 専門教育科目（講義及び実習）の卒業要件単位を修得していること。	【学修内容】 実践的な薬学を学ぶために必要な、物理、化学、生物系の基礎科学教育を重点的に学修する。その学修成果を土台とし、薬剤、薬理、衛生、医療系講義を体系的に学修し、さらに創薬データサイエンス科目や実務経験者による実践的講義等を学修する。各専門分野の実習では、体験に基づく、より深い学修と実験技術の修得を行う。 【学修方法】 理解度の向上を図るため、視聴覚教材等を随時使用した講義で学修する。また、授業外学修を推進し、自ら学ぶ力を養う。 【学修成果の評価方法】 試験やレポート等をもとに、シラバスに定めた評価方法で成績評価を行う。年次進捗とともに体系的な学習が必要になることから、各年次において次年次への進級要件単位数を設定している。学生個々の「専門的知識」の修得度を関連科目の成績から算出し、レーダーチャートで可視化するとともに、ルーブリックによる到達度評価を取り入れることで学修成果の形成的評価及び総括的评价を行う。		【求める資質・能力】 薬学を学ぶために必要な基礎知識、語学力、理解力、論理的思考能力を身に付けている。	
問題発見・解決力	【学修成果】 自然現象に対する強い知的好奇心・探究心を持って薬科学関連分野の課題に取り組み、学術情報の収集・分析及び実験等の研究活動を通して得られる結果を論理的に考察し、解決に向けて議論・発表できる能力を身に付けている。 【到達指標】 総合薬学演習及び卒業研究において、学修成果に挙げる能力を修得していること。	【学修内容】 学修した専門知識を最大限活用して、医薬品に関する調査・分析を行う総合薬学演習で学修する。また、卒業研究では、各研究室において学生ごとに課題を設定し、その解決に向けて研究活動を行う。得られた成果の発表会を行うことで、効果的なプレゼンテーションや質疑応答に必要な技術・能力を修得する。 【学修方法】 アクティブラーニングを導入した学修や、教員の指導の下、学生が主体的に調査・分析・実験等の研究を行う。 【学修成果の評価方法】 発表会を実施し、発表と質疑応答を行い、その成果をもとに、シラバスに定めた評価方法で成績評価を行う。学生個々の「問題発見・解決力」の修得度を関連科目の成績から算出し、レーダーチャートで可視化するとともに、ルーブリックによる到達度評価を取り入れることで学修成果の形成的評価及び総括的评价を行う。		【求める資質・能力】 薬学関連分野の課題に対し、調査・分析・実験等により解決策を導き出す意欲を持っている。	
	【学修成果】 医療人としての規律、倫理等を守り、患者及び医療に関わる全ての人々の立場を理解しながら、創薬科学研究者として果たすべき役割を認識し、地域と国際社会に対して責任ある行動をとる能力を身に付けている。 【到達指標】 薬学概論、製薬企業概論、富山のくすり学、薬学経済の単位を修得し、社会で責任ある行動をとることの重要性を理解していること。	【学修内容】 薬学概論や製薬企業概論では、初年次教育として研究室訪問や製薬企業見学、グループ討論等を行う。基礎薬学実習では、グループでの活動を通して責任感や協調性など、創薬科学研究者として必要な社会性を修得する。また、富山のくすり学、薬学経済では、社会人による講義を実施し、医療産業や職種の現状理解と、キャリア形成への助言等を得る。 【学修方法】 通常の講義や各種実習、及び学外での体験学修を行う。 【学修成果の評価方法】 レポート等をもとに、シラバスに定めた評価方法で成績評価を行う。学生個々の「社会貢献力」の修得度を関連科目の成績から算出し、レーダーチャートで可視化するとともに、ルーブリックによる到達度評価を取り入れることで学修成果の形成的評価及び総括的评价を行う。		【求める資質・能力】 専門的知識と技術を基にして、社会に貢献できる研究者を目指す意欲を持っている。 新薬の研究に携わることで、人類と社会に貢献する意欲を持っている。	
コミュニケーション能力	【学修成果】 他者との積極的な意思疎通を図り、共に学ぶ姿勢を心がけることで、豊かな人間関係を築きながら自己の成長へとつなげることに努め、異なる考えや言語文化を有する人々の立場を理解し、誠実かつ柔軟なコミュニケーションをとる能力を身に付けている。 【到達指標】 総合薬学演習、基礎薬学実習及び卒業研究の単位を修得し、指導教員及び学生（大学院生及び留学生を含む）と良好な人間関係を構築していること。	【学修内容】 講義や実習での同級生とのコミュニケーションを通して、友人や仲間と豊かな人間関係を構築しながら、学識向上を図る。また、研究室での研究活動を通して、指導教員及び他の学生（大学院生や留学生を含む）との協力関係や信頼関係を深め、業務遂行上必要なコミュニケーション能力を向上させる。 【学修方法】 アクティブラーニング形式の講義、実習、総合薬学演習におけるグループワーク及び研究室での研究活動を行う。 【学修成果の評価方法】 試験又は発表会を実施し、その成果をもとに、シラバスに定めた評価方法で成績評価を行う。学生個々の「コミュニケーション能力」の修得度を関連科目の成績から算出し、レーダーチャートで可視化するとともに、ルーブリックによる到達度評価を取り入れることで学修成果の形成的評価及び総括的评价を行う。		【求める資質・能力】 多様な社会の中で、相手に働きかけて意思の疎通を図り、豊かな人間関係を築きながら自己を成長させていく意欲を持っている。	

「コミュニケーション能力醸成のための教育」についての自己点検・評価

アンケートの設問

問1 この科目において少しでも実施している内容を以下の中から全て選んで下さい。

- ☐ ロールプレイング
- ☐ スモールグループディスカッション
- ☐ 学生同士でのディスカッション
- ☐ 対面での教員から学生への質問
- ☐ 対面での学生から教員への質問
- ☐ 非対面(Moodle やデバイスを含む)での教員から学生への質問
- ☐ 非対面(Moodle やデバイスを含む)での学生から教員への質問
- ☐ 実施している項目はない

問2 この科目の教育内容は、どのようなコミュニケーション能力の醸成に寄与すると思いますか。当てはまるものを全て選んで下さい。

- ☐ 薬剤師としてのコミュニケーション能力
- ☐ 研究者としてのコミュニケーション能力
- ☐ 一般社会人としてのコミュニケーション能力
- ☐ 学生としてのコミュニケーション能力
- ☐ 該当する項目はない

問3 この科目において、各学生のコミュニケーション能力の評価を行っていますか。

- ☐ ルーブリック表などの評価表を用いて評価している
- ☐ ルーブリック表などの評価表を用いずに評価している
- ☐ 評価していない

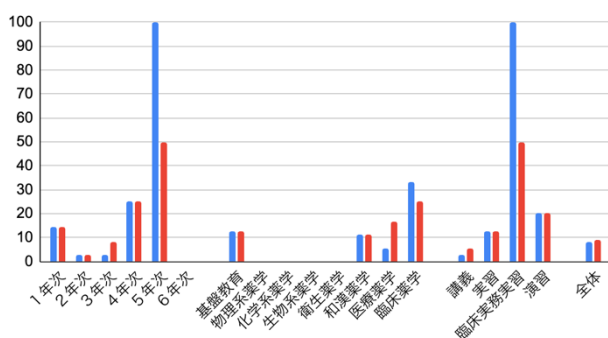
問4 この科目において本来実施すべき内容を以下の中から全て選んで下さい(現在実施している内容も選んで下さい)。

- ☐ ロールプレイング
- ☐ スモールグループディスカッション
- ☐ 学生同士でのディスカッション
- ☐ 対面での教員から学生への質問
- ☐ 対面での学生から教員への質問
- ☐ 非対面(Moodle やデバイスを含む)での教員から学生への質問
- ☐ 非対面(Moodle やデバイスを含む)での学生から教員への質問
- ☐ 実施すべき項目はない

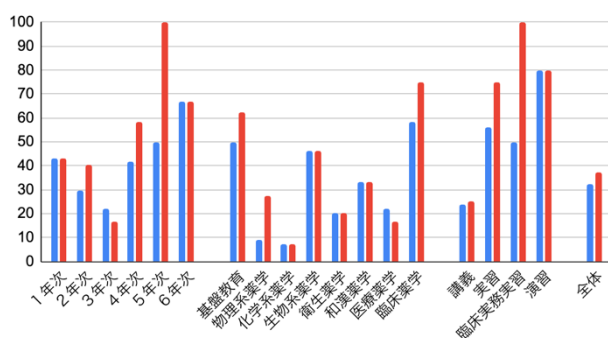
問5 この科目において、コミュニケーション能力醸成のための教育内容を追加することに対し、障害となる理由を以下の中から全て選んで下さい。

- ☐ この科目でコミュニケーション能力醸成を図る必要がない
 - ☐ この科目の中にコミュニケーション能力醸成の教育を追加する時間がない
 - ☐ コミュニケーション能力醸成の教育の仕方が分からない
 - ☐ コミュニケーション能力を評価することが難しい
 - ☐ その他:
-

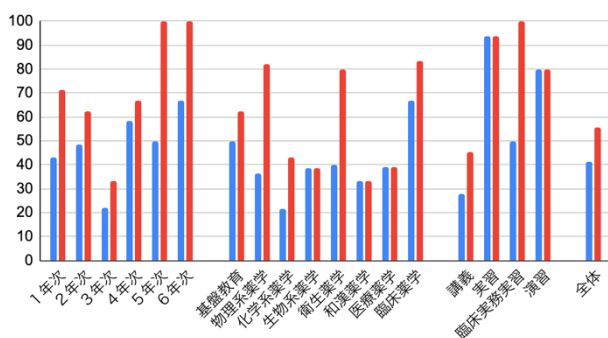
ロールプレイング



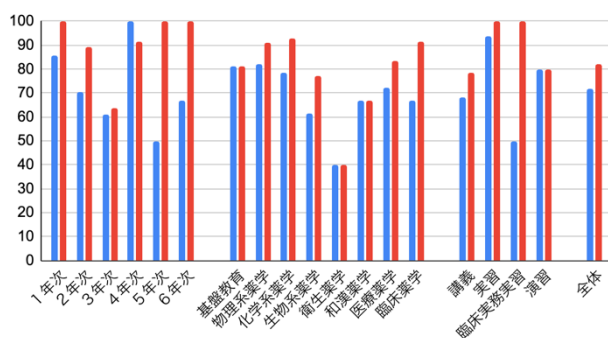
スモールグループディスカッション



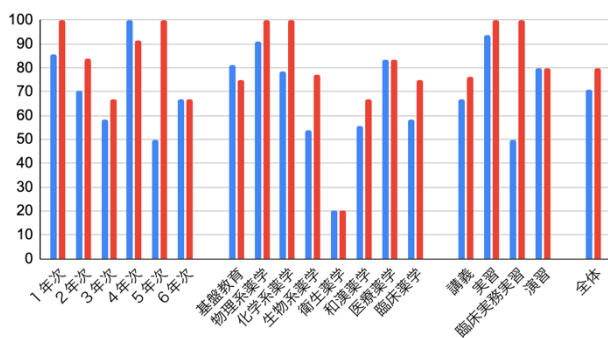
学生同士でのディスカッション



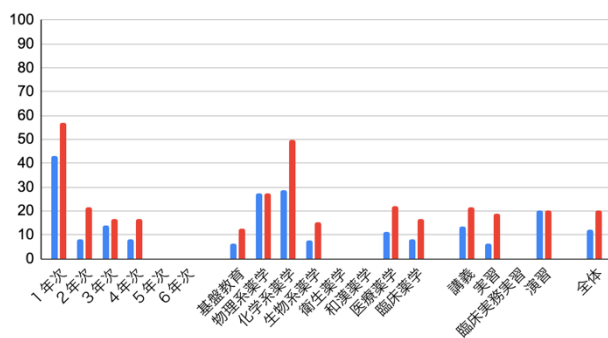
対面での教員から学生への質問



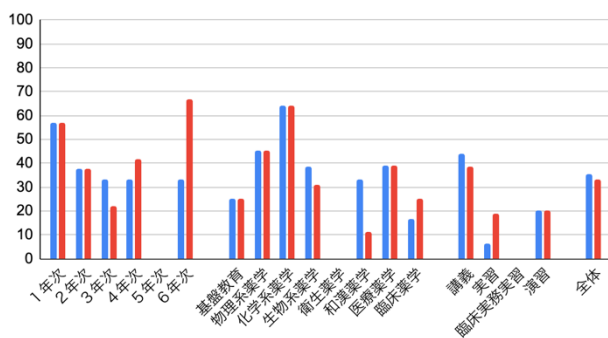
対面での学生から教員への質問



非対面での教員から学生への質問



非対面での学生から教員への質問



項目内容を担当科目において

青: 少しでも実施している

赤: 本来実施すべき(現在実施している内容も含む)

図5 問1「この科目において実施している内容」(青)、問4「この科目において実施すべき内容」(赤)の回答
開講年次ごと、科目区分ごと、講義・実習・演習の別、全体でのパーセンテージを表す。

どのようなコミュニケーション能力の醸成に寄与するか

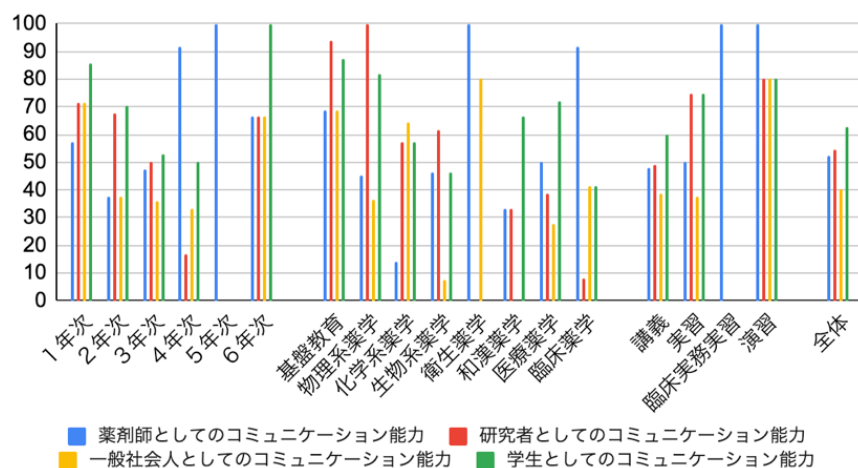


図6 問2「どのようなコミュニケーション能力の醸成に寄与するか」の回答

コミュニケーション能力の評価

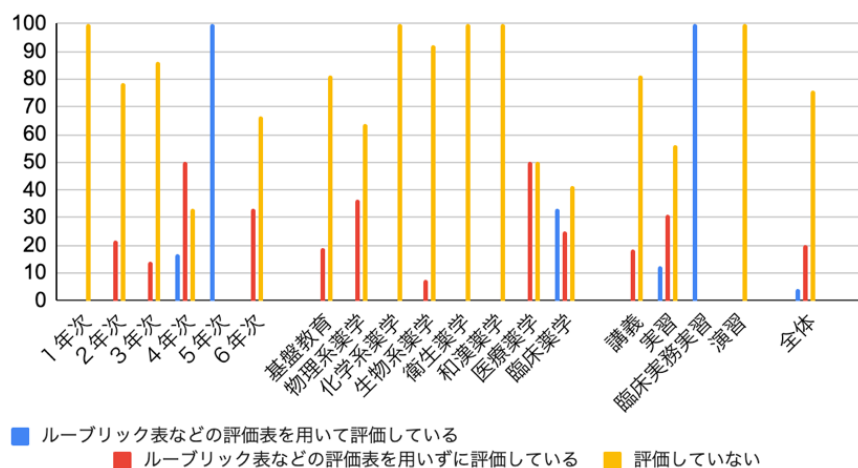


図7 問3「この科目において、各学生のコミュニケーション能力の評価を行っていますか」の回答

コミュニケーション能力醸成の教育内容追加の障害

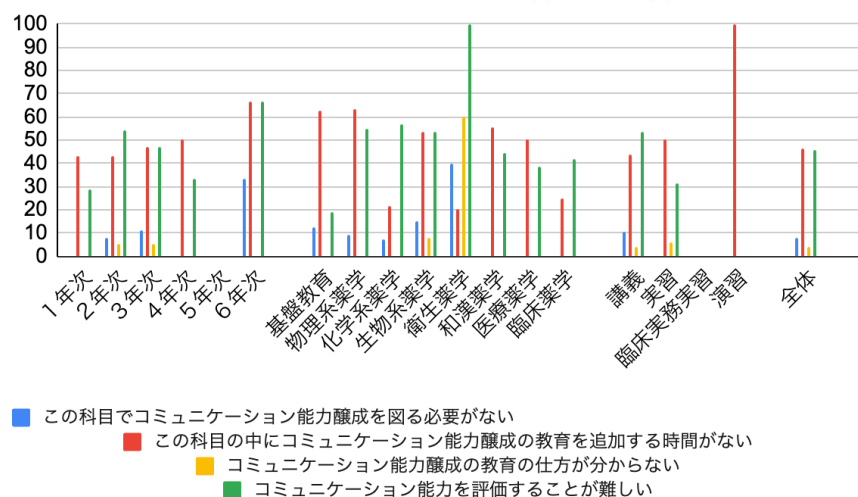


図8 問5「コミュニケーション能力醸成の教育内容追加の障害となる理由」の回答。